

Title	上田貞次郎著 社会改造と企業
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.2 (1922. 2) ,p.285(135)- 288(138)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が如きは、労働黨が社會改造計畫の四條項の一つとなせる國民的最少限度を一般に勵行せんとする趣旨に基くものにして而して斯の如き劃一制は全國の炭坑が國家の手に依りて統一せられたる場合に實行せられ得可きものなれば、其は又やがて國有論の片鱗たるものなりとせられ、随つて此根本問題の解決せられざる限り労働不安は何時まで其跡を留めるであらうとなされて居る其一方に於て、教授は又た三角同盟の破綻は労働組合をして聯合政策を捨て、大組合政策に向はしむるであらう、而して其は産業別組合の形に於て行はる可きか、若し果して然らんならば其は今回の炭坑罷業に於て初めて現はれたる直接行動式の行動と共に吾人の深く注意す可きとなりてせられて居る。次に第十章に於ては我國に於ける労働運動を詳細に觀察して、政府當局が日和見主義に墮して労働組合法を出入せしめ居る間に實際の運動は團結權の要求より團體交渉權の要求に進み、工場委員會制度の要

求に推移しつゝある事實を擧げて其猛省を促し議會政策の信者たる立場より(第一)労働組合を公認すること、(第二)組合に補助金を與へて組合と共に失業問題の解決に従事す可きこと、(第三)労働保險法を施き、最低賃銀法を制定し、且つ工場法の完備を圖ること、(第四)治安警察法を撤廢すること(第五)社會政策の意義を廣く解して大に資本主義の跋扈を抑制すること、(第六)仲裁々判の制を設くること等を奨めて居る、即何れも有益なる文字であるが併し「世界の經濟は如何に動くか」と云ふ題名をさながらに解する讀者の見地よりすれば未だ何となく缺けたる所あるが如く感ぜらるゝなる可し。然も此は教授の自ら覺知せらるゝ所にして、其次第は卷頭の題言に「通貨なり金融なりの方面に於て、世界の經濟が如何に動きつゝあるかの問題に就ても卑見を世間に公にしたいと考て居る」と言はるゝ所に徴して明かであらうと思ふ。然れば吾人は此書に於て以上の諸問題は續巻及續

々卷に於て再び教授の高見に接せんことを希望して置かんと欲する。

(三) 邊 金 藏

上田貞次郎著 「社會改造と企業」

下出書店刊行
定價壹圓六拾錢

所謂改造問題の喧しく論ぜらるゝやうになつたこの三四年來、一般社會科學上の議論に、從て經濟學上の議論には、甚しく疾呼絶叫的、高談放論的若しくは咏嘆抒情的趣味が侵入し來つて、それ丈け實質緻密なる専門的研究は排除せられ、經濟上の述作は惡るゝ意味に於て著しく素人的 dilettantisch となつた。私は此新風潮に専門學究の視野を擴大する利益の伴つた事を決して否認するものではないけれども、併し今吾々は最早その利益よりも弊害に苦しんで居る。動々もすれば修辭を以て論理を補ひ、感想を以て歸納に代へようとする一種の風潮は最早

改められても好い時が來て居る。吾々の——少くも評者の——一切に求めて居るのは、最早悲歌慷慨でも、感傷述懐でもなくて、社會改造の可能性とその方法方向に關する専門學者の現實的研究である。標題に掲げた上田博士の新著は四六版(五百字詰)百七十二頁の小冊に過ぎないが、右の意味に於て評者を益したことは、近頃讀んだ他の如何なる書籍にも下るものではない。本書勿論如何なる意味に於ても大著述を以て評すべきものではない。分量に於ては上記の如く短小であるし、又博引旁證を以て好著の第一資格とすれば、本書は獨逸大學私講師の H. H. Hiltensarpeit には勿論及ばない。本書の特長は固より是等の點に求めることは出來ないのである。

著者の態度は一言を以て評すれば無偏執無成心(vorurteillos)と謂ふべきであらう。彼れは決して如何なる意見學說をも無吟味に承認し、若しくは無吟味に排斥することをしない。同時に

疾言激語は著者の喜ばぬところではあるが、而かも社會主義者側並び資本主義者側の *hunches* を排するに於ては斷じて假借するところがない。乃ち著者は一方に於て「獨占の發生は資本主義發達の必然の運命であつて、此理由から來たる所の資本主義の自滅を救ふ手段はない。即ち社會主義は此意味に於いて自然の進化の道行と見ねばならぬ。」(一五二頁)と云ふと同時に、他方に於ては敢て「自分はブルジョアの智識才能に依てのみ改造は可能なるべしと考へて居る」事を公言して憚らないのである。(一八頁)本書は素と「國民經濟雜誌」「商學研究」其他に掲げられた論文六章を以て編成せらるゝものであるが、著者の思想はその序文と「社會主義と企業者の職分」及び「労働者生産組合」を論じた最初の二章に由て明かに窺はれる。今その要旨を摘記すれば、抑も文化の内容が何であるかは容易に答へ難き問題であるとしても、文化向上の爲めに必要な經濟上の條件が、第一には豊

富なる生産、第二には生産物の合理的分配、第三に職業生活其者が人格の向上を妨げぬものたる事はなるは略ぼ人の一致するところである(と謂ふ)。然るに此等の問題を解決する爲には吾々は先づ企業中心の現資本主義的經濟組織から出發しなければならぬ。そこで社會改造問題の上にて企業の研究が用を爲すのである。ところで今日企業の目的となつて居るところの營利は將來の社會に於て廢止せらるゝものとしても、今日營利の目的を達する手段として行れて居る産業の經營は、何時の世になつても其必要が己むものではない。而して此種の經營を行ふ才幹の最も秀でたるものは通俗にいへば實業家の階級であるから、「社會主義の社會となつても實業家「タイプ」の人物が無用になるとは思はれない。然らば是等の實業家は何を目的として働くか。上田博士は茲で事實に徴して實業家を動かす第一の動機が決して營利ではない事を力説する。若し利潤が主なる刺戟であるならば、營利

の廢せられた社會に於ては産業經營の行はれ得る見込は立たぬ。實業家が營利以外の動機に依りて動き得ること、特に「創造の動機」又は社會奉仕の動機に依りて動き得ることが社會主義を可能ならしむるのである」(一三三頁)と云ふ。此處で上田博士が從來經濟學の試みたる人間行爲の合理的説明を排したのは吾々の賛成を禁じ得ぬところである。さて次に生産物の分配を合理的ならしむる爲めには著者は産業社會化の必要を認めるものではあるが、併し凡ての産業は決して同じ程度に於て社會化に適し、又同じ程度に於て其必要が迫つて居るのではない。先づ國有市有に移すべきものは、鐵道鑛山水力電氣瓦斯市街鐵道銀行保險港灣倉庫等の大經營に適し、且つ獨占的傾向を帯びて居るものを第一とする。と云ふ。併し著者は斯く主張しながら、國有市有事業の成績不良と云ふ事實に目を塞いで居ない。たゞ此の不成績は決して利潤獲得の刺戟が缺けて居る爲めでなくて、官公事業の管理者の

其人を得ざる事、其會計法事務法の舊式なる事、使用人待遇法の私設株式會社に及ばざることに由るものだと云ふ自家特獨の説明を下してゐる。而して此弊害が遽かに之を排除することが出來なければ、國家の特許政策に由りて販賣價格被備者の待遇に干渉し、又其利潤の大なるときは一定の歩合を以て公納金を徴收することに依りて、事實上に社會主義の精神の一部を實現するの外はないと云ふ。而かも之は特に大經營に適し従て獨占的性質を帯びた産業に就ての事である。此外に博士は猶ほ未だ或は社會有に適應せず或は其必要な産業の廣き分野あることを認め而して是等のものに對しては先づ課税監督の方法に依りて社會主義へ向つての第一歩を踏み出さなければならぬと主張して居る。斯る着實實際的の議論は、單純幼稚な社會主義者を以て見れば、固より煩瑣不徹底の嫌ある事を免れぬものであらう。併し苟も魔杖の一揮に依りて社會の全面目が一變する事を信じ得ぬものは、上田博士

と共に現實の事實を基礎として個々の難問題を一つ一つに解決するの勞を避けてはならぬのである。さて以上は文化向上の條件たる富の豊富なる生産とその合理的なる分配に關しての事であるが、猶ほ此外に残るものは、如何にして職業生活其者をして人格の向上を妨げぬものたらしむる事を得べきかの問題である。而して此問題を解決しようとしたものに過去に於ては概ね失敗に歸した勞働者生産組合運動、近年に於ては未だ將來を斷定すべからざるギルド社會主義サンヂカリズムがある。上田博士は此運動に充分の同情を持って居る。併し博士の現經濟組織に關する智識は、その輕々に此運動の將來を樂觀すること許さないのである。故に曰く「苟も自主獨立の精神的價値を體驗し得るものは生産組合を無用の空想として排斥するを許さぬ。而かも近世の生産組織の複雑なるを熟知するものはギルドの高遠なる理想に眩せられて其實行の如何に困難なるかを忘れては居られない」と。(三)

七頁) 博士は頻りに生産者專制の不當を論ずるエツプの説に多くの眞理あることを許すと共にギルドの成功が一般勞働者の自律自制的能力に俟つどころ甚だ大なること認めるのである。(七十二頁其他)

本書の既記の如き小冊であつて、恐らく僅かに社會改造に關する上田博士の意見の一小部分を收録するに過ぎぬものであらう。而かも此斷片からさへも吾々の學ぶところは甚だ大きいのである。加ふるに經濟學上の議論に無用なる美辭麗句を妄用する作家橫行の今日、上田博士の行論の態度の平靜と、その筆致の平淡簡素とは讀者に清新の感を與へることが實に多大である。此一事を以てしても本書は時弊を矯める上に貢献すること甚だ大なるものと云はなければならぬ(小泉信三)

角田睦雄著「新勞働組合運動」

下出書店發行
四六版一八三頁
定價一圓五十錢

本書は角田氏が義塾理財科の卒業論文として小泉教授指導の下に起稿せられたものであつて、英國に於ける最近の勞働組合運動を説明したものである。全卷を二部に分けて、第一篇を新組合主義發生以前の勞働運動と題し新組合主義が如何なる原因に依つて、發生したのか又如何なる形體を以つて、發生したのかと云ふ問題に答へる爲めに筆を自由主義の崩壊に起し、勞働組合の次第に社會主義化された徑路を説明して居る。第二篇は題して新組合主義の諸運動となし、英國勞働運動がサンヂカリズムの影響を受けて生じた最近の傾向を示して居る。即ち「政治運動の幻影に破れた勞働者が行く可き道は、再

び彼等の直接行動に復歸することであつた。かくして一九一〇年からストライキは所在に惹起した。一九一〇——一二年の勞働不安は茲に其序幕を開いた。此勞働不安の内から起つたのが新らしき精神を以て表はれた革命的勞働組合主義、それが氏の云はんと欲する新組合主義である。(八二頁)従つて最も多くの頁をギルド・ンジャリズムの爲めに割いて居る。而して氏は是を評して「洵に意識せるギルドマンは少數である。然しながらギルド社會主義の思想は今日其理論に於ても又實際に於ても英國勞働運動の主流をなして居る事は疑ひもなく事實である。然りそは英國勞働運動の指導的精神である」と。(一八〇頁)

勿論本書は英國勞働運動最近の傾向を十分に記述して居るものと云ふことは出来ない。殊に吾人にとつて最も悲しむべきは本書の著者が本書刊行に先だつて、すでに不歸の客となられ、將來に於いて是が補正を期待し得られないこと